

周氏兄弟と『新青年』

—— 版本調査に基づく新たな視角 ——

秋吉收

論文摘要：笔者在《〈随感录三十八〉是谁的文章？——围绕提及勒庞的言说》（《周作人研究通信》第4号，2015年）的末尾提及《随感录三十八》的署名问题，「日本大安书店1962年影印版」与「汲古书院1971年影印版」存在差异，由此推及鲁迅与周作人错综复杂的意识。本研究在此基础上进一步调查《新青年》的各种版本，揭示历来尚未发现的事实。《新青年》作为中国现代（文学）草创期的核心期刊，其各版本间细小的“异同”有可能是动摇很多研究前提的关键。

关键词：『新青年』、版本、鲁迅、周作人、署名

1 『新青年』の版本について

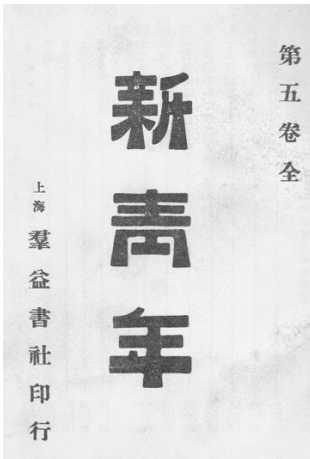
『新青年』（1915年9月から16年2月刊行の第1巻1-6号の誌名は『青年雑誌』で、第2巻から『新青年』に改名）の原刊本は、1915年9月から22年7月まで月刊（第1-9巻）、1923年6月から24年12月まで季刊（第1-4期）、1925年4月から26年7月までは不定期刊（第1-5号）で刊行された。出版元は、1915年から20年（1920年5月発行7巻6号）までは上海群益書社¹で、第8巻以降は新青年社となっている²。その創刊号（1915年9月15日付）の表紙は趣向を凝らした美しいものである。



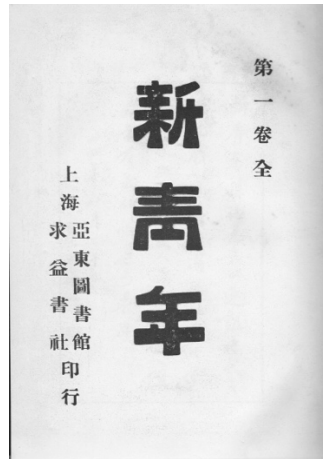
(1915年9月『青年雜誌』第1巻第1号表紙。カーネギー³の肖像画を掲げる。)

大規模な再版は二回行われており、まず1920年5月に、上海群益書社から第1巻から第5巻までの合訂本が出され、その後1936年には、上海亜東図書館と上海求益書社の共同で、1から7巻までの合訂本が出版されている。合訂本の表紙は原刊本に比していかにも質実簡素で、次のようなものである。

- 1 1902年、湖南省長沙にて創立。創始者は、陳子沛、陳子寿の兄弟である。1907年に上海福州路惠福里に支店を開業、1912年に上海中棋盤路（現在の河南中路）に移転し本社とした。1935年、経営不振のため休業、陳子沛の後を継いだ陳漢声が社名を「求益書社」と改めた。陳独秀は当初、友人の汪孟鄒（脚注4参照）が経営する上海亜東図書館からの刊行を模索したが、当時の亜東には荷が重く、陳兄弟の群益書社からの刊行と相成った。なお、群益書社はもともと英語教本などの教科書出版が多く、『新青年』誌上の広告にもその傾向は顕著である。文学関係では、1921年に周氏兄弟の『域外小説集』再版（第一集第二集増訂改版）本なども出している。群益書社については、鄒振環「作為『新青年』贊助者の群益書社」（『史学月刊』2016年4期）等を参照。
- 2 出版社名について正確には、季刊1・2期は「広州平民書社」、季刊3・4期と不定期刊1-3号は「広州新青年社」、不定期刊4・5号は「新青年社」となっている。
- 3 アンドリュー・カーネギー（1835-1919）、スコットランド生まれのアメリカ実業家。「鉄鋼王」と称され、ロックフェラーに次ぐ史上第二の富豪とされる。博物館や学校設立などに多大の寄付を行い、教育・文化の振興に尽くした。



1920年上海羣益書社合訂本
(大安書店1962年影印版。筆者蔵本)



1936年上海亞東圖書館・求益書社合訂本
(東京大学文学部図書室所蔵本)

再版の背景（当時の出版状況）について、『新青年』を創刊した陳独秀と同郷で彼の出版活動を支えた汪原放⁴が、その回想記『回憶亞東圖書館』（1983年、学林出版社）の中で次のように記している。

1922年に至り、我々の出版書は再版、三版、中には四版を重ねるものもあった。全体でいったいどれほどの書籍を出版したことか。1922年までで区

4 汪原放（1897-1980）、近代中国の著名な出版事業者、翻訳家。安徽省績溪出身。1980年上海にて逝去。汪原放は中国古典小説の出版に多大な貢献を為すとともに、外国文学の翻訳にも従事した。陳独秀との関係を辿れば、陳独秀は1902年に留学中の日本で汪原放の父、汪希顔と知り合い、汪希顔は陳に弟の汪孟鄒を紹介する。汪孟鄒は蕪湖にて科学図書館を開業し、陳はそこから『安徽俗話報』を刊行したことで、汪孟鄒とも深い友情を結んだ。辛亥革命後、汪孟鄒は上海で亜東図書館（出版社）を開業、近代出版事業を後押ししていくことになる。汪原放は、叔父の汪孟鄒のもとで亜東図書館を手伝い、陳独秀並びにその息子の陳喬年とも親しく交流した。『新青年』の歴史については、張家康『新青年：時代巨変中の人与事』（2015年、北京大学出版社）、『中国期刊史 第二卷（1911-1949）』（2017年、人民出版社）等参照。なお、長堀祐造著『陳独秀 反骨の志士、近代中国の先導者』（2015年、山川出版社〔世界史リブレット人90〕）27頁には、汪孟鄒がトロツキズム関連書籍を出版していた事実も記される。長堀該書は、陳独秀を中心として『新青年』周辺についても詳細に解説されている。

切り、その版数及び印刷数を列挙すると以下のようになる。(中略) 3. 『水滸』、四版まで印刷、全一万四千部。4. 『儒林外史』、四版まで印刷、全一万三千部。5. 『三葉集』、二版まで印刷、全六千部。6. 『嘗試集』、四版まで印刷、全一万五千部。7. 『胡適文存』、三版まで印刷、全一万二千部。(中略) 18. 『冬夜』、初版まで印刷、全三千部。19. 『蕙的風』、初版まで印刷、全三千部。20. 『独秀文存』、二版まで印刷、全六千部。雑誌⁵の印刷部数については詳らかにしないので、省略する。⁶

(拙訳。下線等は注記のない限り引用者による。以下同じ。)

近代文学の黎明期から五四民主運動を経た当時の出版活況ぶりが垣間見られるが、最後に書き付けられた「雑誌の印刷部数は詳らかにしない」とは、『新青年』のような人気雑誌は、書籍のような系統だった出版計画の下になく、各号(各期)毎に刷った分が売り切れればすぐに増刷し、売れるだけ売ったということだったのかもしれない。1920年にそれまで刊行した『新青年』第1巻から第5巻まで合訂本にて再版したのは、欠号入手の要望に応えつつ創刊号から一挙にまとめて売りつけようという上海群益書社の戦略であったが、それを可能にしたのは、当時における『新青年』の人気の高さゆえでもあった。

1936年に至り、今度は第7巻までの合訂本が再版されるが、無論1920年時と状況は大きく異なっていた。汪原放『回憶亜東図書館』は、当時を回想して次のように書いている。

1935年、群益書社はそれ自体では維持できず休業やむなき状態で、すでに後進の手に渡っていた。だが、陳子寿が社主であった時、私の叔父(汪

5 当時の亜東図書館の刊行に係る主要雑誌に、『甲寅』雑誌(1914-15)、『少年中国』(1919-24)、『新潮』(1919-)、『每週評論』(1918-19)、『向導』(1922-27)等がある。

6 該書、81頁。

孟鄒 亜東図書館主：引用者注）は群益の事務所の家賃の保証人になっており、五千元ほどの負債が生じていた。

群益書社の後を引き継いだのは陳漢声氏で、私は章士釗の事務所で彼に会い、家賃保証の問題を話したが、家主は非常に焦っており、すぐにでも（群益を引き継いだ）亜東（図書館）に怒鳴り込む勢いだと言う。

群益の保証人問題については、結局やはり章士釗に援助を仰ぐしかなかった。亜東の損失は甚大で、群益が亜東のために『新青年』を再版して穴を埋めることになった。

再版『新青年』は、十六開（A4 と B5 の中間サイズ：引用者注）の八冊合訂本である。既成の版型を使用したことで、紙代に加えて印刷と装丁の費用が必要なだけだった。各本の扉に“亜東図書館、求益書社印行”の記載があったのは、当時群益はすでに休業状態にあったからで、“求益”の命名は、陳漢声氏によるものだ。

また、『新青年』のこの時の再版本には、蔡元培と胡適の序文を冠している。⁷

汪原放『回憶亜東図書館』は2006年に至って再版増訂版『亜東図書館与陳独秀』に引き継がれるが、この増訂版で著者はこの部分について以下のような書き換え（補充）を行っている。

私の損失は甚大で、群益に対して『新青年』を重版して償うよう要求した。1936年、私は重版して1500部印刷し、群益にもそのうちの幾ばくかを贈呈した。⁸

7 該書、183頁。

8 汪原放著『亜東図書館与陳独秀』（2006年、上海世紀出版）、228頁。

このように一方で資金調達を使命として企画された1936年再版本は宣伝にも熱心で、その誌面には「重印『新青年』雑誌通啓」と題する次のような広告も掲載されていた。

我が国のこの四十年来、二つの巨大な運動が起こったが、その影響は全国に波及し、国運を左右した。一つは戊戌政変、もう一つは五四運動である。この二大運動の由来は、いずれも多大な影響力を有する二種の雑誌が唱導したことに求められるが、前者は『新民叢報』⁹、後者はすなわち『新青年』雑誌である。(中略) 議論に参加した人士はすべて我が国の俊才であって、それは胡適、周作人、呉智暉、魯迅、錢玄同、陳独秀、劉半農、蘇曼殊、蔡元培、沈尹默、任鴻雋、唐侯、馬君武、陳大齊、顧孟余、陶孟和、馬寅初等である。これらの問題を研究する、或いは我が国におけるその前後の歴史推移を探求しようとするならば、必ずや『新青年』雑誌を繙くべきである。しかし『新青年』雑誌は停刊して久しいがため、すでに買いがたく、図書館に蔵するも甚だ少ない。このため弊社は今回特に再版して販売することで、人々の渴を癒やすのみならず、いまだこの創造時代の重要書籍を所蔵せぬ図書館の欠を補完せるものである。

「上海四馬路中市 亞東図書館 求益書社 謹啓」¹⁰

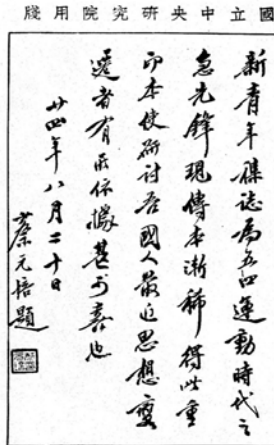
魯迅と唐侯（魯迅の筆名）を別人と扱うことは頂けないが¹¹、この宣伝文か

9 『新民叢報』（半月刊のち不定期刊）は、1902年2月に梁啓超が横浜で創刊し、1907年11月の停刊まで全96期を刊行、辛亥革命へと繋がる近代思想を醸成した。1902年11月の創刊号に梁啓超「論小説与群治之關係」を掲載し「小説界革命」を發起した『新小説』は、『新民叢報』附設の形で誕生したものである。

10 この広告を筆者は原刊本上に探し当てていないので、『回眸「新青年」（語言文学巻）』（1998年、河南文芸出版社）「附録二」によった。

11 列挙された名前の重複については、陳平原「思想史視野中的文学 《新青年》研究（上）」（『中国現代文学研究叢刊』2002年第3期）に言及がある。

らも『新青年』に対する意気込みの大きさが改めて垣間見られる。さて、汪原放の回想にも見えるように、この1936年再版本の売りの一つが、巻頭に附せられた蔡元培と胡適の序文である。参考まで蔡元培の方を挙げてみよう。



蔡元培（1935年8月20日）序

二つの序文の内容は編集部が宣伝文句と大差ないが（宣伝文句が序文に依ったか）、1930年代中期、国内が国民党と共産党を中心に大きく分裂し、1931年の満州事変から更に尖鋭化する日本侵攻という外憂も苛烈さを増す中で、『新青年』再版推薦の筆を執った二人は、進歩青年が一致して近代創世を目指したかの時代に如何なる想いを馳せたことだろう¹²。

次に、戦後の版本について見ておきたい。中国では、1954年9月に（北京）

12 蔡元培（1868-1940）は、1935年当時は国民政府の中央研究院院長（南京）の任にあった。胡適（1891-1962）は、北京大学文学院院长兼中国文学系主任を務め、1932年に自ら創刊した『独立評論』等で健筆を揮っていた。

人民出版社から影印本が刊行されている。筆者は一橋大学所蔵本を調査した¹³が、この版本は表紙もカラー印刷で原刊本の特徴をよく伝えていると見える。ただ、後述する「汲古書院版原刊本影印版（1970年）」と仔細に比べると、両者が使用した“原刊本”は微妙に異なるものであることが判明する。まず表紙が異なる、そして掲載広告の種類、量が大きく異なるのである。創刊号『青年雑誌』1巻1号の表紙真ん中下に置かれるカーネギーの肖像画は、人民出版社版は汲古版に比べて明らかに粗雑である。また、広告は重複するものもあるが人民出版社版の方が多く（詳細は待考）、内容については、その活字もほぼ同様と見えるので、人民出版社が依拠した原刊本は、汲古書院が依拠したものと基本的に同じ組み版を使用し（て広告を適宜変更し）た増刷版ではないかと推測される。つまり、同じ初版本にも恐らくは出版時期が異なる版本が存在するのである（だが、人民出版社版と汲古版の奥付は同一である）。『新青年』の刊行日付と実際の刊行とのずれについてはこれまでもたびたび議論が為されてきたが、増刷版本の存在は、そこに一石を投ずる可能性を有する。

さて、人民出版社版の最大の問題は、多くの号で奥付が取り去られてしまっていることだ。使用した原刊本の情報探索も限られたものにならざるを得ない¹⁴。前出（注10）『回眸「新青年」（語文学巻）』の「編選出版説明」に、“八、本書は主に1954年人民出版社影印の『新青年』を底本として編選を行った。校訂時には1936年（民国25年）上海亜東図書館、上海求益書社重印の『新青年』を参照した。”との記述がある。本国での『新青年』を総覧するプロジェクトに原刊本でなく1954年再版本を使用していることから、ひと揃いの原刊本が如何に希少であるか改めて確認される。（ただ、「校訂に1936年再版本

13 CiNii（国立情報学研究所データベース）によれば、日本の大学図書館で所蔵するのは一橋大学のみ。奥付によれば、2450部印刷、定価は揃いで6万8千元（！）となっている。

14 田丹『「新青年」1954年影印本前九巻与原版之区别考略』（『中国现代文学研究叢刊』2016年第9期）はこの版本について詳細をレポートする。田によれば、最も完備した『新青年』原刊本は北京鲁迅博物館蔵本で、第1巻第1号と第3号を欠くのみとのこと。

を使用した」というのは疑問である。後述するが、この再版本は問題が多く、校訂に使用するには耐えないと考えるからだ。現在まで、『新青年』版本の問題が如何に疎かにされているか改めて認識させられる)。

さて1988年に至り、上海書店から第1巻から第9巻までの全巻影印本が刊行されている。筆者は学習院大学図書館所蔵本を調査した¹⁵が、表紙はカラーでなく二色刷で、創刊号のカーネギー像は“粗雑”版であるので、1954年人民出版社版の焼き直しかと思いきや、掲載広告が人民出版社版と（汲古書院版とも）異なっている。内容は原刊本と見なして良さそうなので、これもまた別版の初版本の可能性もある。ただ残念なことに、各巻を一冊に合本するに当たって奥付はやはりほとんど削除されてしまい、刊期等の重要な情報は詳らかにできない。出版説明にも版本に関する詳細な記述は見られない。

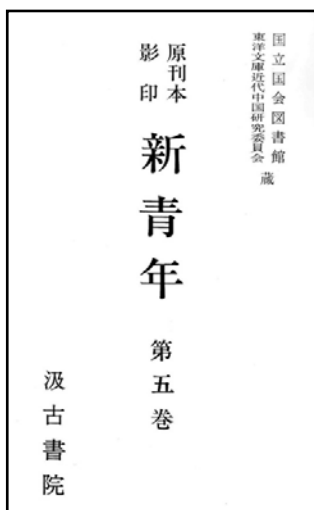
次に、日本における再版本刊行状況を見ておきたい。日本でも戦後盛んになった近現代中国研究上の需要からも、『新青年』を手許に見たいという要求は多かったが、戦後中国との国交回復もおぼつかず、当時、政治闘争で混乱する中国の書物を利用することは容易ではなかった。そうした斯界の切望に応えたのが、1962年の大安書店¹⁶影印本である。その附録『新青年総目録 解題・総目次、著者名索引』に附された市古宙三の「後記」によれば、その影印に使用した版本の状況は極めて複雑であった。まず、1から2巻は1936年亜東・求益合訂本を使用、3から5巻は1920年群益書社合訂本を使用、そして6から9巻には原刊本を使用したという。揃いの『新青年』を何とか日本の関係者に届けたいという執念が伝わってくる仕業である。やや問題を抱えながらも、

15 上海書店再版本自体の奥付によれば、1988年6月初版、印刷数500冊。12分冊で定価は合計850元である。

16 大安書店（1951-69）、東京に設立された中国書籍書店、出版社。日中関係が複雑な中でも積極的に活動し、また中国から多くの貴重書、文献を輸入した。現在の日本における著名な中国書籍専門書店たる汲古書院、燎原書店、朋友書店などはすべて大安書店閉店後にその社員たちが開いたものである。詳細は大山茂著『大安社史』（1988年、汲古書院）等参照。

少なからぬ日本の識者は大安本によって初めて『新青年』の実際に触れ得ることとなった。

1970から71年にかけて、汲古書院¹⁷から決定版と呼びうる影印本が刊行される。版型をB5版へとやや縮小したのは惜しいが、使用にはむしろ簡便であろう。この版本は、見開きの第1頁に誇示する如く、「国立国会図書館・東洋文庫近代中国研究委員会藏 原刊本影印」になる。印刷もかなり鮮明（ただ、惜しむらくはすべて白黒である）で、奥付も完備する。前述、1954年人民出版社版と比べて考察したように、原刊本自体の揺らぎ（初版も恐らく一種類ではない¹⁸）をひとまず考慮に入れなければ、現在望みうる最高の版本と考えるとよさそうだ。



1970-71年、汲古書院影印本。

17 汲古書院（1969-）、東京飯田橋に本社を置く主に古典文学、文学学等を手がける学術出版社。大安書店の活動を引き継ぎ創業した。

18 もしかすると海賊版流布の可能性もあるのではないかと待考。

従来、魯迅研究を始め、数多の研究が『新青年』を使用してきたが、管見の限り、以上にまとめたような版本の異同が問題にされたことはない。大学などの図書館にも原刊本はほとんど所蔵がなく、収められるのは大安本か、1920年或いは36年の再版本が多い（筆者の実地調査によれば、京都大学など少なからぬ大学図書館が再版本を「原刊本」と誤認している¹⁹）。だが、以下に見るように、これら再版本にはかなり大きな問題が潜んでいることが今回初めて明らかになった。使用には注意が必要である。

2 周氏兄弟「随感録」と『新青年』版本

従来、『新青年』の刊本やその発行、編集にまつわる事実（史実）の探求には多くの精力が注ぎ込まれ²⁰、また陳独秀や胡適、周氏兄弟と雑誌の関わりについての研究はまさに汗牛充棟の状態である。だが、『新青年』の誌面自体を仔細に観察した研究はほとんど見られない。版本の状況がきわめて複雑なこと、特に中国では一般的に貴重資料の閲覧は煩雑を極めることなどがその主たる原因と思われる。主要な版本と目される、原刊本、1920年再版本、1936年再版本の三種を詳細に比較した研究はこれまで皆無である。

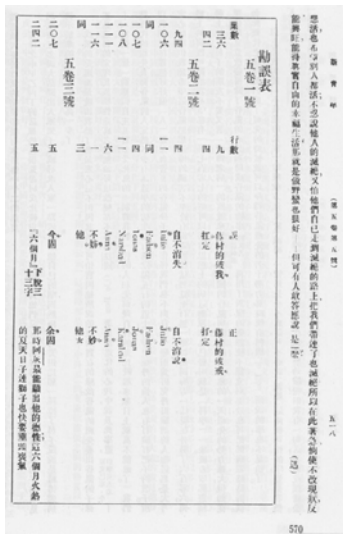
拙稿はまず、冒頭「内容摘要」にも掲げた周氏兄弟の作物「随感録三十八」及び『新青年』の重要記事たるその「随感録」を端緒として版本比較を行う。三種の版本すべての頁を比較することは膨大にわたるので、今回はまず、時期的により原刊本に近い1920年の群益書社版を中心に取り上げ、適宜1936年の

19 すべての図書館・研究機関のすべての蔵書を調査できているわけでもないが、例えば、京大附属図書館はCiNii記載によれば、1から7巻の原刊本所蔵とあるが、実際には4巻までは1920年再版本であった。同様に大阪大学附属外国学図書館（旧大阪外大図書館）も2から7巻の原刊本所蔵とあるが、実際にはすべて1936年再版本だった。

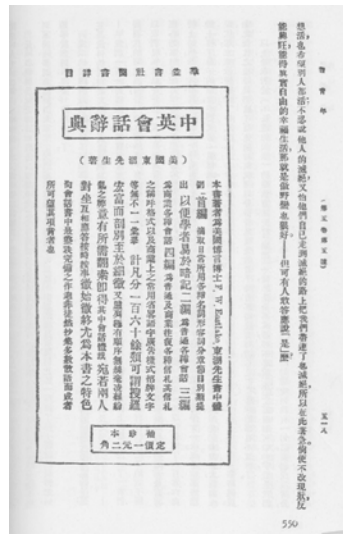
20 例えば、『新青年』に掲載される「広告」の重要性に注目した論考だけでも、謝明香・王華光「『新青年』的広告運営及策略定位」（『編輯之友・史料』2011年11期）、銭理群「『新青年』知識分子群体的形成—以雑誌広告為線索」（『北京社会科学』2013年3期）、袁一丹「雜誌聯盟与閱讀共同体—以『新青年』的交換廣告為線索」（『中国現代文学研究叢刊』2015年7期）などある。ただいづれも版本の異同にまで注意は払われていない。

亜東図書館・求益書社版を参照する（後述するが、1936年再版本は、1920年再版本の組版を基本的にそのまま使用した可能性が高い）²¹。

『新青年』第5巻第5号に掲載された「随感録」は、「35」から「38」まで四篇であり、目次には「35」と「36」の著者は「唐俟」、「37」と「38」は「魯迅」と署名される。目次の記載は、原刊本、二種の再版本とも同様である。だが、筆者の注目する「随感録三十八」を誌面にて確認すると、意外な事実と遭遇することになる。文章最後の署名が、原刊本では「(迅)」となっているが、1920年と36年の両再版本では、署名欄は空白なのである。実際の誌面は以下の通り。

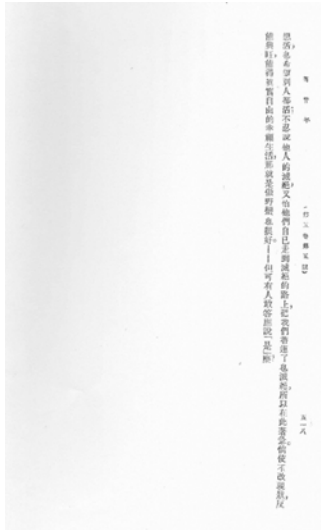


原刊本（埋め草として『新青年』5巻1から3号の「正誤表」掲載）



1920年再版本（埋め草は、群益書社刊『中英會話辭典』広告掲載）

21 1920年版については、便宜的に大安影印本を、1936年版については、東京大学文学部図書室所蔵本を使用した。なお、東大（文学部）は3種の『新青年』を所蔵する。大安本全、1936年再版本全（1-7巻）、そして原刊本の第4巻と第5巻である。（Cinii記載では、第1巻原刊本も所蔵となっているが、筆者は見つけられなかった）。



1936年再版本（「正誤表」「広告」部分いづれも空白）

1920年当時、魯迅周作人兄弟は北京の八道湾胡同に同居しており、また「随感録三十八」自体が二人の共同執筆であった（詳細は冒頭「内容摘要」に引く拙稿参照）可能性に鑑みるに、署名削除に兄弟二人の意志が介在していたのかもしれない²²。1936年の再版でも署名「迅」が復活することはなかった。

署名に注目すると、1918年9月15日刊行の5巻3号に掲載された「随感録二十五」は、更に驚くべき変更を施している。「随感録二十五」は魯迅が『新青年』上で「随感録」の筆を執った最初の一編であり、その意味でも注目される文章である。原刊本の文末署名は「(俟)」(魯迅の筆名「唐俟」を指す)、だが1920年再版本はそれを、わざわざ「(適)」と書き換えているのである(1936年版も同様)。ただ、1920年版で「適」の横に付された傍線が、1936年版には

22 魯迅周作人兄弟の書いた文章の署名が錯綜している事実についての論考も少なくないが、「随感録三十八」について、例えば張菊香「魯迅周作人早期作品署名互用問題考訂」（『魯迅研究月刊』2002年6期）等が参考になる。

見えない。「(適)」からは容易に胡適の名前が連想される。だが無論、該文の筆者が魯迅である事は揺るがない。『新青年』上でも編集、執筆と極めて重要な位置にあり（その後は政治的対立から『新青年』を離れるに至った）胡適の名前を、魯迅とわざわざ入れ替える意図はどこにあったのだろう。しかも1920年は両者共に文壇にて最も活躍していた時期に属する。どうしてこんな面倒かつ“嫌味”な所作に及んだのか。謎は尽きない。（植字工の単純ミスの可能性が最も高いかも知れないが）。

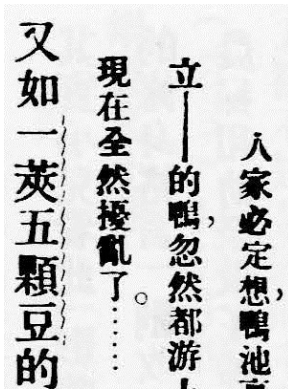
八。之父。第一種只會生，不會教，還帶點嫖男的氣。
 「師何以還須受教，如此看來，還該有父範學
 知中國現在，正須父範學堂；這位先生，便須編
 (俟)

『原刊本』5卷3号掲載
「随感録二十五」署名部分。

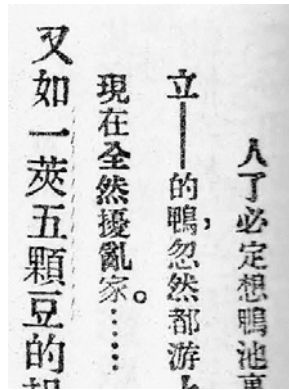
八。之父。第一種只會生，不會教，還帶點嫖男的氣。
 「師何以還須受教，如此看來，還該有父範學
 知中國現在，正須父範學堂；這位先生，便須編
 (適)

『1920年再版本』5卷3号掲載
「随感録二十五」署名部分。

魯迅の署名「俟」を胡適の「適」に置き換えた「随感録二十五」の一つ前の「二十四」にも、細かな異同（誤り）が存在する。文中、「人“家”必定想，鴨池裏面有～」が、「人“了”必定想，鴨池裏面有～」となり、3行目の「全然擾亂“了”」が「全然擾“家”」となっている。つまり、「家」と「了」が、きれいに入れ替わっているのだ。



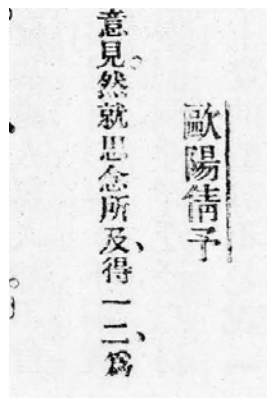
『原刊本』「隨感錄二十四」冒頭。



『1920年再版本』

実は、こうして目を皿のように探していくと、異同（再版本の誤り）が幾つも見つかるのである。漢字使用に止まらず欧文の綴り間違いや、カンマと句点、括弧の体裁などその誤りは多岐にわたりしかも極めて多い。

同じく第5巻からもう一例挙げてみよう。1918年10月発行5巻4号に掲載された、歐陽倩予の著名な一篇「予之戲劇改良觀」、そのタイトル下の署名を、1920年再版本では「歐陽倩予」と作る。単純ミスであろう。



『1920年再版本』5巻4号より。

他にも興味深い異同が随所に見られ、紙幅の都合でここにはごく一部しか紹介できないが、原刊本と再版本は活字もよく似ているが、よくよく見ると太さがやや異なったり、字の配列も微妙にずれている箇所が多々あり、両者は同じようでは実には同じではない。つまり、1920年（及び1936年）の再版本は初版の再利用でなく、「版を組み直して」いるのである。先にも書いたが、1920年と1936年の両再版本は、掲載広告が大きく異なる点を除けば、微妙な字の太さや配列がほぼぴたりと一致する。推測だが、初版の組み版は使用後に解体してしまっただが、1920年再版時に使用した組み版は、解体せずにそのまま保存していたのではないか²³。そうであるなら、発売当初はそれほど注目されなかった『新青年』が、徐々に爆発的な売れ行きを示した結果ゆえの所作であったと考えられる。

今回すべてを調査できたわけではなく、再版本の詳細についても完全に明らかになってはいないので、保留とせざるを得ない判断も残る。ただ少なくとも、今後の研究において、その版本を疎かにすることの危険性は明らかとなった。その版本特定は容易でなく、著名な大学図書館でも再版本を原刊本と誤って登録しているのであるから、事はやや深刻である。

3 群益書社 1920年再版本（第1～5巻合訂）の周辺

再版本のうち、1936年本は、前に引く汪原放『回憶亜東図書館』に、負債を抱えて倒産寸前であった群益書社（及び亜東図書館）の借金返済のためであったことが証言されていたが、ここでは、その1936年版の元版であったとおぼしき、誤植など問題の多い1920年再版本についてその経緯を追ってみたい。まずは、当時の『新青年』に関わる事項、特に陳独秀の動向、編集状況などを中心に経年で簡単に辿ってみよう。

23 脚注7に引用した汪原放著『回憶亜東図書館』の中で、汪がはっきり「(1936年再版は)既成の版型を使用した」と書いていることもその推測を裏打ちする。

1917年 1月、陳独秀が北京大学文化学長に赴任したため、編集本部も北京に移る。しかし、印刷は依然として上海で行う。

1918年 1月、陳独秀が『新青年』編集部会議を召集。(李大釗、魯迅、錢玄同、劉半農、周作人、胡適、沈尹默が編集部に加わる。)

1919年 1月、『新青年』の罪状に対する答弁書』発表。5月、五四運動。6月、直接行動を呼びかけるビラ配りで陳独秀逮捕。『新青年』は5ヶ月間停刊となる。『新青年』雑誌社は広州に移転し引き続き出版を行う。9月、釈放された陳独秀は上海に戻り、中共中央工作を主導する。『新青年』も上海に移るが、北京編集部も存続させた。10月、フランス租界巡査による『新青年』編集部への捜査が入り、陳独秀らが拘留され、『新青年』はまた停刊となる。この頃より『新青年』掲載記事にマルクス主義、十月革命などの内容が増え、同人間の分岐が鮮明になる。12月の第7巻より、陳独秀単独の編集となる。

1920年 陳独秀は北京を離れて上海に戻り、『新青年』編集業務も上海に移る。群益書社との矛盾が徐々に顕在化し、9月発行の第8巻より、群益書社を離れ、独立出版に切り替える。(群益書社提訴?)。陳独秀は陳望道を招いて編集に参加させ、『新青年』社を設立した。第8巻第1号より、正式に中国上海共産主義小組の機関誌となる。²⁴

陳独秀の度重なる逮捕や、編集体制の改変、編集部の移動などが複雑に交錯する、1920年当時の緊張した状況が垣間見られる。『新青年』の編集部と出版社の群益書社の間では、もともと原稿料や雑誌の定価設定など、経営に直接関わる問題での齟齬が発生していたが、7巻6号の「労働節記念号」を発行(1920

24 脚注4に引く参考書等のほか、江田憲治・長堀祐造編訳『陳独秀文集3』(2017年、平凡社東洋文庫881)付録「陳独秀年譜」を参照。

年5月1日)するに当たり、頁数が平常よりかなり膨らんだことから群益は該号の定価を上げることを提案した。だが、陳独秀は頑として受け入れず、それが直接のきっかけで両者は袂を分かつことになったという²⁵。陳独秀の『新青年』社は、ドル箱だった『新青年』を手放す見返り要求で群益から提訴され、詳細は不明だが、ちょうどこのタイミングで1920年までに発行した第1巻から第5巻までの合訂再版本が販売されたのはむしろ偶然ではあるまい。群益側に少しでも利益を還元しようとしたと推測される。文壇の寵児『新青年』を巡る訴訟沙汰はむしろ文壇の注目するところとなった。郭沫若『創造十年(1918-1923・発端)』(1932年筆)は、魯迅の言葉を引用しつつ次のように書いている。

新青年社が群益書局から独立する時、書店の主人が訴訟を起こしたのは、周知の事実である。

「終には独立し、一切の書籍は大いに改訂を加え、改めて印刷し、新たに店びらきをしたのだといったけれども、然も旧番頭の方でも永遠に旧版を用いて、ひたすらに印刷し、販売し、そして年々何とか記念大廉売をやっている」(かぎ括弧内は魯迅「上海文芸の一瞥」より：引用者注)²⁶

実はここで魯迅は、郭沫若の創造社と泰東書局の関係を揶揄して言っているので、『新青年』社を指しているわけではない。郭沫若は、泰東書局と創造社の関係は魯迅の言うような悪いものではなく、魯迅がかの有名な群益書社と

25 『新青年』・陳独秀と群益の関係に触れた文章も少なくない。例えば、齊鵬飛「『新青年』与“群益書社”的决裂及独立辦刊再梳理—以中国人民大学博物館藏“陳独秀等致胡適信札”為重要佐証」(『光明日報』2012年5月10日)は、陳独秀と胡適の書簡往復からその微妙な推移を繙いた興味深い論考である。

26 郭沫若『創造十年(1918-1923)・発端』(1992年、人民文学出版社『郭沫若全集 文学編第十二巻』)、31頁。日本語訳は、小野忍・丸山昇訳『郭沫若自伝2 黒猫・創造十年他』(1968年、平凡社東洋文庫126)、117頁。この部分は、魯迅が講演「上海文芸の一瞥」(1931年)の中で創造社を辛辣に批判したことに反論したもので、魯迅該文から引用しつつ論を進めている。

『新青年』社のいざこざを創造社のことと勘違いしていると反駁している。だが実際に、群益（とその後を継いだ亜東・求益）は1920年再版組み版を握り込んで、1936年には再再版することになるのだから、魯迅の語る出版社の営為自体は的を射たものである。

事ほどさように、群益書社にとってこの『新青年』第1－5巻再版合訂本の販売が、社運を託した一大事業であったことは疑いない。実際、『新青年』雑誌が第8巻から群益の手を離れるその直前の第7巻最終号まで、『新青年』誌上にはこの合装本再版の広告が一再ならず掲載されている。広告は二種類で、掲載は8回（再版決定後毎号掲載か）、まず6巻4号（1919年4月刊）から7巻5号（1920年4月刊）までのうち、7巻3号を除いたすべての号には、小さな文字でぎっしりと詳しい宣伝がしたためられた広告が掲載されている。そこには、「『新青年』は「中国近五年の思想変遷史」と見なすことができ、登載の各篇はすべて精彩に富んだ、古今東西を知る上で欠かせないものである。云々」と謳われ、また「以前に『新青年』誌上で討論された孔子についての議論は、同胞の将来に深く関係する重要な問題である」などの文句は、旧思想陣営をも取り込もうと意識したものであったやもしれない。少しでも多くの顧客を取り込もうと必死の形相である。

もう一種の広告は、7巻3号（1920年2月刊）に掲載されたものである。

こちらは、広告掲載期限、つまり『新青年』が群益書社の手を離れる（第8巻）間際になり、「特価」「予約期限」などの文字を大きくして最後の販促をかけたものだと理解できる。平装本銀五円（元）、精装本六円五〇銭、また送料は、国内五〇銭、日本八〇銭²⁷、その他の外国が一円六〇銭である。筆者の現在までの調査によれば、日本の図書館が所蔵する再版本は1920年版よりも1936年

27 群益書社は、1902年に長沙に開業後、1907年に上海、1909年には日本東京にも支社を開いている。1935年に経営不振のため休業、その後「求益書社」と改名して、1936年再版『新青年』合訂本発行。最終的に、1952年に廃業。

前 五 卷

新 青 年

特 價

外 埠
以 發 信 日
為 準

期 限
九 年 正 月 十 號
至 三 月 十 號 底

常 裝 實 價 五 元 特 價 四 元 五 角	精 裝 實 價 六 元 五 角 特 價 六 元
-------------------------------	-------------------------------

現在新青年更討論的問題，
有許多是由從前一直說下來的。所以，
非看從前的，
不能明白原委。

上海 群益書行

前 五 卷 雜 著 從
章 文 好 多 許 有 真

全 套
五 冊
一 元 九 角

版の方が圧倒的に多い²⁸。1920年版の広告はどれほどの訴求力を有し、中国国内と海外で再版本は一体どれほど売れたのだろうか。

こうして、1915年から1920年という新文学草創期に『新青年』を発行し、陳独秀及び胡適や周氏兄弟の活動を支えた群益書社は、徐々に文壇の後景へと退くこととなったのである。

エピローグ 周氏兄弟（魯迅）と『新青年』

魯迅は、1934年に書いた追悼文「劉半農君の思い出」の中で次のように述べている。

彼が北京に来たのは、恐らく『新青年』に投稿した後に、蔡子民先生ある

28 1920年版は東京外国語大学蔵本と、原刊本と誤記の京都大学蔵本のみ。1920年版は第5巻までの合訂だが、1936年版はほぼ全貌を窺える第7巻まで揃うことから1936年版の方が利便性も高かった。細かいことだが、紙質も1936年版の方が同じ酸性紙でもやや良質に感じられる。

いは陳独秀先生が招いたものだろう。(中略)『新青年』は一号出るごとに必ず編集会議を開き、次号の原稿を相談し確定した。当時最も私の注意を惹き付けたのは陳独秀と胡適之であった。(中略)なかの数名は——少なくとも私のような人間——は時に頭をかしげてちょっと考えてみる必要があった。半農は胸に「武器庫」を持つとは決して人に思わせないそういう人だった。だから私は、陳や胡を敬服したが、半農には逆に親近感を抱いたものだ。²⁹

魯迅周作人兄弟は1918年に『新青年』編集部に参加していたが、当時の近代文学革命の先鋒として、さらには「狂人日記」(1918年5月発行4巻5号)を始めとする自己の創作・翻訳・評論活動の重要な陣地として、魯迅はそれを重視していた。編集者の一人としても、弟の周作人は言うに及ばず、錢玄同その他多くの友人・人士と、その傾向、方針について議論したし、また日常のふとした発言にもしばしば登場しており、彼にとって『新青年』はごく身近でまた関係の極めて深い存在だった。しかもその位置は基本的に終生変わることなく続いていたのだ。「1918年3月10日 許寿裳宛」では群益書社に言及し、編集者として一定の役得を受けていたことが垣間見られる。

『新青年』第二号はもう出たので、別便にて送る。今年は群益社がたくさん贈ってくれ、金も取らないので、これも誌代を返すには及ばない。³⁰

晩年に近い「1935年1月4日 趙家壁、鄭伯奇宛」からも、『新青年』が依然として重要な存在を保っていたことが窺い知れる。

29 1934年10月上海『青年界』月刊6巻3期原載。『魯迅全集 第6巻』(2005年、人民文学出版社)、73頁。

30 『魯迅全集 第11巻』(2005年、人民文学出版社)、360頁。

まず『新青年』及び『新潮』をいささか繙きたく、もし借用叶うなら、人をやって書店にお届け願えれば有り難い。³¹

だが、そうした愛着ある『新青年』に関して言及する時も、魯迅の筆は時にわざと曖昧にはぐらかす。後に著名な武俠小説家となる宮竹心（原名、宮万選）から送られた、文壇消息を尋ねる手紙に対して、魯迅は「周樹人」の署名にて次のように答えている（1921年9月4日付）。

魯迅とはすなわち姓が魯で名は迅、それほど奇異とは言えない。唐俟も恐らくは仮の名で、魯迅と似ている。だが『新青年』の誌面には一字の名前が他にもあるが、それもたいていはその本人が実在する。「狂人日記」も魯迅の作で、そのほか「葉」「孔乙己」など皆『新青年』に掲載されるが、この種の雑誌はたいてい読み終えたらすぐに捨ててしまうので、お貸ししようがなく、誠に申し訳ない。³²

魯迅本人が知らぬフリをして自己のペンネームを解説するさまは微笑ましいが、「恐らく」「たいてい」などの曖昧な口ぶりは如何にも魯迅らしい。「この種の雑誌はたいてい読み終えたらすぐに捨ててしまう」との言い訳も、几帳面な魯迅の所為とは異なるようにも感じられる。こうした表面的には全く意に介さぬ態度のうちに、却って魯迅のこだわり、重視が潜む事例をこれまでも私たちは数多く見てきた。

「隨感録」等、『新青年』掲載各作品、ひいては魯迅周作人兄弟の文学活動を

31 『魯迅全集 第13巻』（2005年、人民文学出版社）、332頁。当時、魯迅は『中国新文学大系』（1935-36年、上海良友圖書印刷公司）「小説二集」の編者を任せられ、収録作品の選定作業に従事していた。『魯迅全集 第15巻』（1985年、学習研究社）、603頁の訳注も参照。

32 『魯迅全集 第11巻』（2005年、人民文学出版社）、419頁。

更に深く探求する³³ ために、小論で明らかになった版本の複雑さなど、“最も重要な工具書”『新青年』雑誌自体の未解決の問題をまずは明白にする必要がある。そしてそれは恐らく、ただ『新青年』に限った問題ではないであろう。

追記：本研究は、JSPS 科研費 18K00355 の助成を受けたものである。

33 周氏兄弟と『新青年』との直接の関係について、張耀杰『北大教授与《新青年》』（2014年、新星出版社〔北京〕）、上海魯迅紀念館編『魯迅与《新青年》』（2016年、上海世紀出版）等を参照した。